高畠町

日照りとのたたかい ～ 黒井堰の歴史 ～

約400年前、福島県会津から米沢に来た上杉氏は、領土を増やすため積極的に田んぼを作ることに努めました。これにともない水を引くための堰や、大切な水をたくわえておくための、ため池をたくさん作りました。

現在の高畠町糠野目より赤湯・宮内・梨郷まで、30余りの村を北条郷といい、領内でももっとも豊かな土地でありましたが、晴れの日が続くと水不足により米がまったく出来ないことがしばしばありました。田んぼに水を引くためにいくつもの堰が掘られましたが、水不足をなかなかなくすことができず、当時の殿様である上杉鷹山公は心を痛められ、貧しくこまっている村人を救うことが出来ないものかと考え、その時の勘定奉行、黒井半四郎忠寄に調査を命令したのでした。低いところを流れる松川の水を引くことは簡単なことではありませんでした。雨の日も、晴れた日も調査を続ける忠寄の姿を見て、村人たちは協力を断わる人はおりませんでした。調査が完了した次の年、1794年（寛政6年）ようやく工事を行うこととなりました。

松川の大樋（水路の橋）

米沢市窪田にある千眼寺のうらで松川を堰止め、新たに取水口を作り幅3.6mもある水路をほり、高畠町糠野目で松川を渡す長さ127m、幅2.1m、深さ0.9mの大樋（水路の橋）を作る大工事でありました。1795年（寛政7年）6月16日ようやく完成を見ることができ、この日藩主治広は先代の藩主鷹山と共に現場にやってきて、この手柄をほめたたえるとともに、忠寄の活躍を長く語り継ぐために、この水路を「黒井堰」と命名されたのでありました。

その後、南陽市梨郷・椚塚方面にまで水路を掘り進み、実に6年もの時間をかけて北条郷は美しい水田となったのです。

現在残っている「黒井堰」は国営・県営事業によりコンクリートで作られた水路に生まれ変わっておりますが、黒井半市郎忠寄の活躍は200年以上も過ぎた現在でも語り継がれております。

今の黒井堰

高畠町福沢にある黒井堰碑

黒井半四郎忠寄…1747年～1799年　米沢藩の家臣として、水利や開田に力を注ぎ、領内に数多くの堰（水路）を残しました。

松川…黒井堰取水口や大樋のある場所は、今は最上川と呼んでいますが、昔は白川が合流なるあたりまで松川と呼んでいたことから、本文では、松川として書いています。

【参考文献　黒井堰史…黒井堰土地改良区】